シネマ探訪

「金沢に駅前シネマがあった、そして今は・・・」

太田　義幸
通りすがりの映画好き

この「シネマ游人」第2号に初めて私の文章を掲載してもらったが、その時のタイトルが「金沢にスタア劇場があった、映写機をまわしていた」だった。

そして、今回は金沢映画館シリーズ第2弾にして、おそらく最終章である「駅前シネマ」略して「駅シネ」についてである。

駅前シネマと称しているが、立地しているのは実は駅の前ではなく駅の近くなので本当は「駅近シネマ」であろうが、「駅の前にあるから便利だよ～」ということを狙っての命名であろうか。その駅は今や新幹線も停車する金沢駅である。駅から金沢の台所である近江町市場方面に向かって歩くこと5分ほどのところに、その駅シネはたたずんでいた。

駅シネは普通にピンク映画館であった。スタア劇場と違って、路地をこそっと曲がったところにひっそりと立地している。ピンク映画館として実に正しいスタンスである。

私は大学の映画研究部に所属していたのだが、その映画研究部に毎月5枚ほどの駅シネの招待券と駅前シネマニュースが送付されていた。この駅前シネマニュースは、単に上映予定作品のお知らせだけではなく、ピンク映画館発信のものと侮るなかれという感じの反骨精神あふれる映画評なども掲載されている硬派な読み物だったように記憶している。

まあ、駅前シネマニュースはそれとして、注目はその招待券ですわ。部室の机の上にどうぞご自由にお取り下さいってな感じで放置されている訳である。まあ、そうなると1回2回は利用しないと送付してくれた駅シネに対しても申し訳ないってことになりますよね。

そんなことで、ある日、招待券で入場して座席にお利口さんに座っていた私の隣に誰かが座ってきたのである。満席状態ならそれもありだが、ピンク映画で満席というのはまずありえない状況である。その空席バンバンの状況のなか隣に誰かが座ってきたのですわ。「何なん、うっとうしいなぁ」と思っていたら、なんとなんと隣の男が私を触ってきたのでございます。ひょえ～と思い、すぐに席を移動したら、その後、その男が追いかけてくることは無かったので良かったのだが、あとからいろいろ聞くと、どうも駅シネは発展場であるということであった。ガビーン。

そう言えば、20年以上前に職場の旅行で金沢に行った際に、まだ駅シネはあるのかなっと思って路地をこそっと曲がったら、ちゃんと存在していたのだが、その際に上映していたのが、何とホ

モ映画！（ゲイ映画と呼ぶよりもホモ映画と呼んだ方がしっくりとくるようなポスターだった）　ホモ映画なるものがこの世にあることを初めて知り、そして初めてホモ映画のポスターを見てビックリこいた職場旅行の思い出である。お客の入りはどうだったんだろうなあ。盛況だったんだろうなぁ。

また、こんなエピソードもある。映画研究部には女性も入部しており、女子もピンク映画を興味として観たい思いもありますわな。でも、女性一人や女性同士で行くのも気が引けるとのことで、その女子は部員の男2人に声をかけ3人で観に行ったそうな。当然、上映作品を確認して行くようなことはないですわな。ピンク映画なんだから。でも世の中、下調べというものはとても重要である。その3人が行った時に上映していたのはSM映画の3本立てだったとのことで、上映後、3人はお互い何の言葉も発することもなく実に気まずい雰囲気で家路についたそうである。

全国的に単館の映画館がほとんどなくなっていく中で20年以上前にホモ映画を上映していた駅シネは今もあるのだろうか？

加賀百万石の城下町「金沢」。北陸3県の中心地。関西地方や中部地方からの小旅行には最適だあ。今や東京あたりからでも新幹線でビヤ～と人々がやってくる小京都。私が学生だった頃も観光客であふれていた。観光客だけではなく香林坊や竪町には北陸地方の遊び人が集っていた。賑やか、賑やか。

しかし、しか～し、みんなが金沢に遊びに来るけど、実は金沢の人たちは週末にちょっと遊びに行くところがないのである。金沢周辺の人たちは金沢に遊びに来るけど、金沢の人たちは金沢を出ても行くところがない。

行くところがないので娯楽は映画だけと言うことではないだろうが、当時、金沢には本当に多くの映画館があった。当然、今のようなシネコンはなく、単館の映画館がここにもあそこにも。香林坊の東急の裏手には当時単館の映画館が6、7館は並んでいたような記憶がある。今では1館も残っていないが、その周辺の案内板には今でもシネマストリートと記載してあるそうな。なので、何も知らない若者がその案内板を見ると、「なぜにここがシネマストリート？」と思うに違いないですな。でもでも、その場所にある駐車場の名称は「シネマストリートパーキング」となっているこの不思議。

そんな映画館大国だった金沢でも今やシネコンは当然で、私が大学を卒業したのは30年以上も昔のこと。大学時代にあった映画館が今も生き残っているとは考えがたいが。

で、今年（平成30年）の3月に金沢で学生時代の仲間と集う機会があった。会場は金沢駅近くの小料理屋。となると、とりあえず駅シネは存続しているのか確認するのはあまりにも当たり前のことである。相変わらずの路地をこそっと曲がると・・・。

おおっ、あるじゃん、存在しているじゃん。普通にピンク映画館として。昭和33年創業とのことなので60年も経っているのに今だに健在とは。

おそるべし駅シネ！　万歳、駅シネ！

しかも、こそっと曲がる路地の民家の窓に手書きのチラシがぶら下がっており、そこに書かれていたのは「駅シネの割引券１１００円で売ってます」。

駅シネは何とも地域に根差した映画館だったのだ。これには感動した！

昭和の香りただよいまくる駅前シネマ

追　記

今回、この原稿を書くために駅シネについてネットでいろいろ調べてみたら、新たなことが判明したのでお伝えしたい。

1．駅前シネマニュースは、現在ではＷＥＢで毎月配信されているのである。基本的には上映のラインアップであるが、ブログもあったりと、あいかわらず頑張っているのである。

2．今年7月のラインアップを見ていたら、今年に亡くなった大杉漣が出演し、あの「おくりびと」の滝田洋二郎が監督したピンク作品を上映していた。追悼上映ということか。駅シネは渋すぎる！

3．駅シネは発展場であったと記述したが、どうもその状況は変わっていないようだ。と言うよりも更に発展しているようである。普通にホモの方々が入場するだけではなく、どうも女装の人たちが集う場所としても認知されているようで、女装は劇場のトイレでしてもいいですよ的なことが掲載されている記事もあった。駅シネが今も健在なのは、そのような方々のコミュニティの場として確立されているからなのかもしれない。

ビバ！駅シネ！

エッセイ

私の心をとらえた映画

水野圭次郎　桑名むぎのえいが部

１９９０年当時私は中国の南京大学で中国語を学んでいました。前年に中国では天安門事件が勃発し、大学の中はまだ不穏な空気が漂っていました。中国人学生は５人以上で集まってはいけないとか、外国人が中国人の家を訪問するときは事前に居民委員会に申請しなければならないなどという社会主義国家らしい面倒なルールが沢山ありました。

私が中国語を学んでいた留学生クラスにはソ連、東ドイツ、モンゴルなど東側諸国の留学生がおり、別のクラスには北朝鮮やアフリカからの留学生もいました。中国語の担任は大学を卒業したばかりの孔先生という女性でした。彼女は英語が堪能で、決して表には出さないのですが、学生たちと同じく中国の民主化を望み、西洋文化を積極的に取り入れたいという考えの持ち主でした。

孔先生は授業の中で中国ロックの元祖であり民主化の象徴である崔健の「一無所有」の歌詞を紹介してくれたり、当時、若者の間で流行していた映画のシナリオをリスニングの題材に使うなど留学生が楽しみながら中国語を学べるように工夫をしてくれました。その中で私の心を捉えた映画が「青春祭」（１９８５年中国映画）です。

この作品は張曼菱の小説「有一個美麗的地方（ある美しい場所）」が映画化されたもので、都会に住む 17 歳の少女李純が文化大革命のあおりを受けて、中国雲南省西双版納（シーサンパンナ）のタイ族の村に下放（毛沢東の指導により都会の知識青年たちを辺境や地方で徴農させる運動）され、都会とは違う奔放な村の暮らしに戸惑いながらも溶け込み、恋をします。しかし、彼女はある出来事をきっかけにその村を離れざるを得なくなり、他の村で小学校の教員生活を経て、都会に戻ります。その後、数年ぶりにタイ族の村を訪れると、山津波が村も村人たちも全てのものを飲み込み、荒涼とした大地のみが広がっていたというショッキングなストーリーでした。

私の目を特に目を引いたのは色とりどりの衣裳を身に纏ったタイ族の女性たちが滝壺で嬉しそうに水浴びをするシーンで、それを見て中国にも少数民族がいて、独自の文化や衣装を持ち、暮らしているということに気付かされました。

それがきっかけとなり、私は中国の辺境の地域を訪れ、少数民族の写真を撮るようになりました。私を写真家の道に進ませるきっかけになったのがこの映画でした。

１９９６年から１９７６年の１０年間に及ぶ文化大革命は名目上、資本主義の復活を阻むための社会運動でしたが、実際は毛

沢東の復権のための大規模な権力闘争で、多くの知識人が迫害され、貴重な文化文物が破壊され、多くの罪のない人たちが犠牲となりました。この時代は中国人にとって忘れられない傷をもたらし、この時代をテーマに以下のような映画が非常に多く作られました。

「青い凧」「活きる」「覇王別姫」「サンザシの樹の下で」「シュウシュウの季節」「大地の子」「太陽の少年」「小さな中国のお針子」「芙蓉鎮」「ラストエンペラー」「ワイルドスワン」「神なるオオカミ」他

さて、私が留学を終える頃、ベルリンの壁は崩壊し、ペレストロイカでソ連が解体されました。その頃、机を並べていたソ連人、東ドイツ人はどうなったのだろうと心配になりましたが消息は分かりません。中国は少しずつ民主化が進み、今では経済大国になりました。

映画はその時代の移り変わりが常に映し出されていると思います。映画を歴史を映し出す貴重な記録として、これからもずっと残していってほしいと思います。

ドクターXのつぶやき

安

ケーキを買いに、菰野のアクアイグニスに向かう。車は日産 TEANA（ティアナ）。納車のときにディーラーに意味を尋ねたら、分からないので調べますと。名前の意味も知らないでセールスをしていたのだ。しばらくして、携帯に連絡がはいった。「アメリカ原住民の言葉で、『夜明け』という意味だそうです」。そうか。でも何だって日本の車にインディアン語の名前を付けるのだ▼ふと前の車を見ると、AQUA（アクア）とある。これはラテン語、「水」を意味する。船ならまだしも、陸を走る車に「水」とは変だ。そういえば、PRIUS（プリウス）もラテン語で、「以前に」という意味の副詞だ。現代英語では「先行するもの」という意味があるから、そのつもりでつけた名前かな▼車にはラテン系の命名が多い。VAMOS（ヴァーモス）は「行きましょう」、LOGO（ローゴ）は「まもなく」、ALTO（アルト）は「高い」、TANTO（タント）は「たくさんの」。これらはスペイン語やポルトガル語やイタリア語だ。フランス語の車名もある。Porte（ポルト）は「扉」、Lapin（ラパン）は「兎」、Mirage（ミラージュ）は「蜃気楼」▼英語で STINGRAY（スティングレイ）と名乗る軽自動車が前にはいって来た。何だって？こいつは「あかえい」って意味じゃないか。一メートルもある平べったい魚で、刺されると腫れあがって猛烈に痛い。ひどい名前を付けたものだ。HUSTLER（ハスラー）ってのも走っている。「ペテン師」とか「ばくち打ち」って意味だ。女の子が乗る車じゃないな、と思ったら、女の子が運転している。意味を分かってて、買ったのかなあ？▼もうすぐ目的地だ。混んできたぞ。横道から入れてくれと手の合図。どうぞ、どうぞ。来たのは軽の IGNIS（イグニス）だ。こいつはラテン語で「火」を意味する。何でまた車の名前は横文字だらけなんだ？と思いきや、すれ違った大型バスは、三菱の「ふそう」。これは「扶桑」だから日本語だ。でもFUSOと書いてあったから、ポルトガル語、スペイン語、イタリア語では「紡錘」だ。それだと、ちょっと変すぎるか▼目的地到着だ。IGNIS に続いて右折。すれ違いに出てきた車はまた AQUA。「火」に「水」だから、これでは火消しだ。着いたところは AQUAIGNIS（アクアイグニス）。直訳すると「水火」になる。お互い心は真逆だから、うちの夫婦のことみたい。少し涼しくなってバカンス・シーズンはもう終わり。VACANCE はフランス語、SEASON は英語。VACANCE SEASON は日本でできた外国語もどき。欧米人には通じないので、ご用心。